今さら聞けない資機材の使い方

〔第9回〕救急情報ネックレス

清水　浩（鈴鹿市消防本部）

1. はじめに

鈴鹿市は三重県の北部に位置し東は伊勢湾、西は鈴鹿山脈に面した自然豊かな街です。江戸時代には東海道の宿場町として石薬師宿と庄野宿を擁し、白子宿は伊勢参宮道の宿場町として栄えました（**写真1**）。現在は産業と文化がバランスよく発展を遂げ、自動車レースの最高峰「Ｆ１」が開催されるモータースポーツのまちとして、全国的にも知られています（**写真2**）。人口は約20万人で、Ｆ１開催時には鈴鹿市の人口に近い観戦者が国内・外から鈴鹿市を訪れ、にぎわいを見せています。

社会が抱える様々な問題の１つとして「少子高齢化」が叫ばれており、日本はいまや高齢化社会のはるか先をいく「超高齢化社会」に突入しています。また、同時に核家族化も進んでいるのが現状です。このような社会背景の中、一人暮らしの人や一人で行動する人が多くなっていることから、救急現場においても意識障害などにより、情報を得られない事例が多くなっていると感じている救急隊員は少なくないと思います。

私たち救急隊は、現場で医師の目の代わりをしなければいけません。「情報が分からない」「家族に連絡がつかない」これで良いのかと疑問が湧きます。このような場合、救急現場での情報をどのように得ると良いか、症例とともに鈴鹿市の取り組みを紹介したいと思います。

写真１　鈴鹿の町並み

写真２　鈴鹿 F1 日本グランプリ

2. 救急情報ネックレスがない場合

(1) 症例１

「60歳代女性が道路で転倒し、倒れている。意識はあり」同じ自治会の女性からの119番通報です。

救急隊現場到着時、傷病者は道路に腹臥位で倒れており（**写真３**）、救急隊長が呼びかけるとうなずくものの、大量の嘔吐（**写真４**）とともに意識レベルの低下が見られました。

観察結果は次のとおりでした。

症例１の観察結果

・意識レベル　Ⅰ－３　　その後　　Ⅲ－100

写真３　傷病者は道路に腹臥位で倒れていた

写真４　大量の吐物あり

・呼吸数　　12 回／分　　不規則
・血　圧　　236 ／ 136
・SpO_2　　94%
・脈　拍　　90 回／分
・麻　痺　　右半身

救急隊は車内収容すると同時に、嘔吐による窒息に注意しながら酸素投与を開始しました。心電図を測定し血圧を繰り返し測定、瞳孔を観察すると縮瞳している状態でありました。

傷病者観察基準に基づき、病院選定を開始。その結果、重症項目に意識・血圧・ショック症状が該当。脳卒中項目にも半身麻痺、及び進行性の意識障害が該当したため、病院リストから直近の二次病院を選定しました。

本来であれば年齢・氏名、かかりつけ病院、既往歴、服薬歴、アレルギー、最終食事時間、家族への連絡などの情報を病院へ送らなければいけません。しかし、傷病者は意識レベルが低下しており、通報者は傷病者と面識がある程度で詳しくは分からず、情報を得ることができませんでした。

⑵　考　察

このように傷病者が一人で倒れており、何も情報が得られない場合、救急隊のみならず病院側も情報の収集に苦労します。

現在、「救急情報キット」と呼ばれるものが全国で広がっています。これは救急及び緊急時に迅速な支援が行えるよう、緊急連絡先やかかりつけ医などの情報を専用の容器に入れ、自宅の冷蔵庫に保管することで、万一の場合に備えることを目的とするものです。これも救急隊が情報を入手する一つの方法だと思います。

しかし、今回の症例のように近所の道端で倒れていたり外出時に倒れたなどの場合には、傷病者から情報を得ることはできません。

鈴鹿市ではこのような数多くの事例を検討し、「救急情報ネックレス」（**写真５**）を考案し平成 24 年度から導入しています。

写真５　救急情報ネックレス

３．救急情報ネックレス

災害時要援護者台帳に登録されている一人暮らしの方のうち希望者を対象に、氏名･生年月日･性別･住所･既往歴･かかりつけ病院・緊急連絡先等の救急活動に必要な情報を登録します。ネックレスには、固有の番号が印字されており、番号を情報指令課に照会することで、その人の情報を得ることができるといったシステムになっています（**図１**）。

救急情報ネックレスを身につけていただく（**写真６**）ことで、外出時で傷病者が会話不可能な状態に陥っても必要な情報を得ることができ、家族や病院などと連絡を取り合

（表）　（裏）

図１　パンフレット